

2
乃夏然

川口松太郎

川口松太郎

古都夏草

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

都憂愁

和四十年十二月二十五日發行。

価 五百八拾円

著 者 川口松太郎

発行者 矢貴東司

印刷者 奥村正雄

発行所 株式会社 桃源社

東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目

十二番地 電話 671 四〇〇一、二番

目 次

第一話 名妓万栄 五

第二話 円山しだれ 三三

第三話 洛北再会 六三

第四話 庖丁姉妹 九一

第五話 嵯峨野悲雨 一二三

第六話 祇園祭 一四一

第七話 霧の中の比叡 一六七

第八話 清水寺少女 一九五

第九話 金色の臍 二一九

第十話 大根焚きの味 二四三

第十一話 鹿ヶ谷遁世 二六七

第十二話 金閣寺の白蛇 二九一

あとがき 三五七

題 挿
字 絵

谷 中
崎 村
松 貞
子 以

第一話 名妓万栄

奈良のお水取りがすむと、京の春は駆け足でやって来る。と、古くからいわれている。

「えらいぬくおすな」

「そろもお水取りもすみましたかな」

こんな挨拶も、古都早春の枕言葉であらう。

奈良東大寺二月堂のお水取りは三月十二日、古都の人人は、此の日がすむと冬が終るといい伝え、春の明ける喜びを分か合うのだが、お水取りが終るともう直ぐ踊りの噂だ。祇園の都をどりは四月の一日から、先斗町の鴨川をどりは十五日から、昔は廓だけの行事であったが、今では重要な観光資源で、おどりが始まると観光客がどつと京へ入り込んで来る。

田村志麻女も、今でこそ岡崎の片隅にささやかな旅館を開業しているが、その昔は、祇園の万栄と名乗り、誰知らぬ者もない名妓で、都をどりの大スターであった。今とは違って、七八歳の頃から見習いに出て、九ツで舞妓になった者もある時代、義務教育の小学校さえろくろく行かず、一生芸妓で通す者も少なくなかった。

志麻女の万栄もその一人で、十歳で舞妓の披露目をして、一力の主人から万亭の万の字を貰い、明治大正昭和の三代にわたる、祇園町の盛衰を生き抜いて来た生粋の祇園女であった。

「おどりの始まる頃になると、茶屋も芸妓も浮き浮きとして、町中の色がすっきり変ってしまいます。どのお茶屋にも祇園だんごの紅提灯がかけられ、あたりが華やかに浮き立ち、建仁寺の管長はんまで、寺の門にも提灯をかけようかと、お笑いになった事があるのどす。おどり月の近づく祇園町は、ほんまに、夜の明けたようになって、近年は四条通りも嘘のように明るく、どの店にもネオンがつかますさかいおどりの提灯も目につかんようになりましたけれど、昔の四条通りは、祇園さんの石段下から、縄手のあたりまで夜は真っ暗で、灯影^{ひかげ}も見えません。四条の橋詰には、南座がありますよって、芝居の開いている時は、縄手から橋詰までが明るいだけで、あとは真っ暗、夜ざりは人通りもなく、ひっそりしておりました。そんな暗い町中へ、紅提灯がずらりと並びますよってに、花見小路の入口の、一力さんの角のところが、遠くからも華やかに見え、おどり気分が浮き立ちました。花見小路ばかりでなく、向かい側の富永町から住吉町へかけ、小さな路地裏に至るまで、提灯がかかりましたから、しずかな京の町に、此の一区劃だけが浮き上って見えたものです」

と、志麻女は、おどり月の祇園の景色を、目の前へ浮かべるように話し出す。

全く彼女のいう通りで、昔の四条通りは、石段下から縄手まで、両側は古道具屋が多かったから、夜は早くから戸をおろし、鈍い軒燈がついているだけの、物さびしい町並であった。

万亭の角に立って、花見小路を覗き込んでも、茶屋の行燈がぼうやりともっているばかりで脂粉の香の華やかさは見られない。東京の花柳界は、赤坂にしても柳橋にしても、町へ足を踏み入れただけで何となく色彩を感じるが、祇園町や先斗町は、どの家も古く黒ずんで、行燈を取ってしまえば、普

通の町家と大差のない家の造りになっている。

それでも先斗町は、四条から三条までの、細い石畳の両側に、軒を接して並ぶ茶屋のたたずまいが、特別の雰囲気を作って、色街の艶めかしさも感じられるが、祇園町は何処を歩いても、一般の町家と変りがない。

それだけに、おどりの華やかさは、町の様相をがらりと変え、ネオンの明るい今の四条通りからは、想像も出来ぬほどの嬉しい色彩を流すものだった。

暗く沈んだ町通りの一カ所に、紅提灯が夜色ににじんで、春を伝えるしのように、ぽっかりと浮き

「ほ、おどりの提灯がかかった」

と、町行く人も胸をときめかす。

今では四条通りの店店も提灯をかけ、商家も協力するようになったが、その昔は、なかなかそんな訳には行かず、色街と町家はくっきり区別され、花見小路も特殊地帯と思われていた。

それだけに、紅提灯は特に目立って、芸妓舞妓も華やかに、茶屋の仲居も腕に燃をかけ、客を寄せようと待ち構えている。

先斗町の鴨川をどりが、東京風であるのに対し、祇園の都をどりは純粹の京舞で、井上流に統一され、他流を一切寄せつけない。井上流は能から転化した御所舞で、色気は薄いが気品の高さを誇っている。近年は、京舞の価値も漸く認められ、家元の八千代さんは、芸術院会員にもなったが、その昔は祇園町だけの、狭い範囲の郷土芸能にすぎなかった。

それを、今のような高い価値に仕上げたのは、三世家元の片山春子、この人が祇園新地の舞の師匠

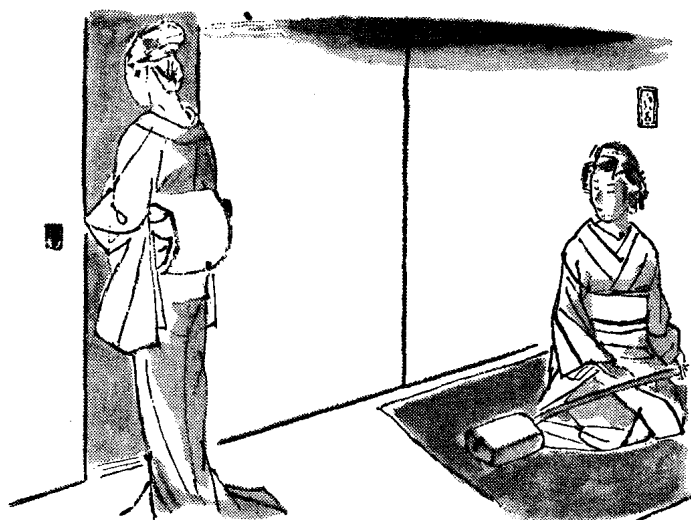
を始めて、都をどりを創始した恩人である。志麻女の万栄は、三世家元の直弟子で、春子のきびしい訓練を受けたお陰で、祇園町随一の舞の名手になった。

彼女は、昔の修業時代を思い返して

「それもう、ほんまにきびしゅうおしたえ。その頃の稽古場は板の間で、寒中でもお座布ざふは敷けまへん。うちはお師匠つしやはんに見込まれて内弟子の修業をさせて頂きました。朝は五時起きどす。暗い内に起きて、お掃除をして、朝御飯前にお稽古があつて、冬でもびしゅう汗をかきました。なんし、お師匠つしやはんは百一歳まで生きたお方で、北条秀司先生が、京舞いう芝居をお書きになりましたが、ほんまにあの通りどす。九十を過ぎるまで、本名の片山春子で通さりましたから、京舞は片山流と思うお方もあつたくらいです。九十を過ぎてから、三代目八千代になりましたが、井上流は、代代の世襲と違つて、門弟の中の一番上手な者が、次の家元を継ぐ仕来りになっています。昔の京舞は、三味線を使わず、笛や鼓ばかりであつたのを、春子お師匠つしやはんが、今のようになつて聞かれます。四代目の家元はんは、春子お師匠つしやはんの、あのきびしさに仕込まれて来やはったさかい、あれだけの名人にならはったんどす。然しもう、うちの若い時のような、修業は今の人には出来まへん。辛抱が続きまへん。あの辛抱をしあげたさかい、あれだけのお方になり、うちらから、此の年になつても、舞の所望をして下さるお方があるのどす。ほんまにありがたい事と思つています」

志麻女が芸談を始めると、尽きるところを知らない。百一歳まで生きた三世八千代の事、先代市川左團次の愛人といわれた井上佐多女たち、達人といわれた誰彼の思い出話が、めんめんとしてつきる時がなく、それからそれへと語りつがれて行く。

志麻女が妓籍を脱して、今の岡崎へ、ささやかな旅館を構えたのは、終戦間もない頃の事であつた。



芸妓はやめても、所望するお客があれば、喜んで座敷へ行き、叩き込んだ舞の手振りを見せ、それを自分でも楽しみにしていた。単に舞ばかりではなく、地唄の名手としても知られ、三味線も弾き、京女独特の、味わいの深い唄いぶりは、聴く人の胸に迫って来るようなさびを持っている。

もともと、地唄は盲人法師から始まったものだけに、目あきの人が唄っても、盲人声にならないければ、本来の味が出て来ない。

志麻女の天性のしわがれ声は、地唄の性格によくつり合い、六十に近い年の功も加わって何ともいえぬわびしさをかもし出す。

舞を舞えば井上流の達人、地唄を唄っても優れた才能を持つばかりか、幸流の鼓も打ち、笛太鼓の鳴物にも長じて、多芸多才、芸と名のつくものの一切を身につけて、人人の尊敬を受けつつ妓籍を脱し、旅館まん栄を開店したのだ。

岡崎の細い路地を、幾つか曲った突き当りの、小型自動車がかろうじて入れる程度の奥まった場

所で、その昔は、なにがしという公卿華族の控え家であったのを、譲り受けて改造した家であった。

如何にもお公卿さんの住居らしい古めかしさを、巧みに明るく改造し、厚い苔の生えている庭や、うるさいほどに茂った裏の竹藪はそのまに残して、祇園町から十分で来られる場所でないが、遠い山家へ来たような奥深さを感じさせる。まん榮へ泊って、琵琶湖の鯉や、若狭から来る塩物料理で酒をくみながら、志麻女の昔語りを聞いていると、しみじみ京都へ来た思いがする。

彼女の鼻肩は、実業人なら古老格で、芸界では老人組、現役を退いた政治家や、店を譲って隠居した商家の旦那など、悠悠自適している風流人が多かった。

いづれも志麻女の芸を愛する人人であったから、酒がはずんで所望されて、地唄の三味線が聞えて来たり、祇園町から地方が呼ばれ、座敷舞を舞う気配が、竹藪のある裏座敷までほのぼのと聞え来る夜が再三であった。時には又こんな事もあった。

仕事をしている私の部屋を覗き込んだ志麻女が

「見とおくれやす、ええ年して裾引きましてん」

と、渋い藤紫の、舞衣裳の裾を長く引き、先笄の鬘をかぶって

「舞を見たいというお客さんがおまして、琴葉や桃江や市樂が来ています。先生のお話が出て、みんな会いたいいうてますけど、おいやどすか」

と、訊きに來たのだ。

「あんたが舞うのか」

「そうどす。見とおくれやしまへんか」

「そういったって、お客さんがいるのだろう」

「へえ、五組のお客さんが、みんな集ってしもうて。神戸の奈良原さんが舞を見せるとおっしゃったのが初めて、一人で見ると大勢で見ると一緒や。此処のお客はお前の芸を知っている者ばかりやさかい、お誘い申せというたはりますけど、おいやどすか」

「奈良原さんというのは」

「ご存じでしょうか。昔の兵庫県の知事さん」

「兵介さんか」

「そうどすかな。兵介の旦那さんです。それにちょうど山田抄太郎さんもお見えになって、無理から引つ張り出されて、泊り合せたお客さん残らず広間へ引き出されてしまいました」

奈良原兵介は、戦前の兵庫県知事で、疑獄事件の飛ばつちりを受けて失脚し、その後はケーブルカー会社の会長におされ、のん気に晩年をおくる芸好きな風流人だ。それに長唄の山田抄太郎がいると聞いて、一も二もなく腰をあげ、兵介さんのいる表座敷へ行った。裏から表へは、一段低い渡り廊下で作られ、苔庭の前を通りすぎて二三段高くなったところから表座敷が始まる。昔は、庭を隔てた離れであったものを、今は母屋とつなぎ合せ、その間にも客室を造り、古い家と新築座敷とが、調和するように、心を配って造られている。

広間といっても十畳と六畳の二間つづきで、正面には六曲の金屏風を立て、その左側には緋毛氈が敷かれ三味線が置いてある。十畳の間には、奈良原さんのここに顔と、その隣に長唄の山田抄太郎、少し離れて毎日新聞社長の本田さん、それと向かい合って未知のお客さんが和服で坐っている。琴葉、桃江、市楽たち、祇園の一流どころが、若い芸妓を引きつれてその間に挟まり、酒のはずみかけている所へ、私が入って行ったのだ。

兵介さんとはゴルフ仲間で、昔はよく遊んだものだが、打ち絶えていて久しぶりの御対面。

「顔は変らんが頭がうすなったな」

と、いきなりそんな挨拶の気さくなつきあい、双方の無事を喜び合う。

つづいて山田抄太郎師、これは東京でも会う機会があつて挨拶も目顔だけで

「あんまり飲んだらいかんよ」

と、たしなめる間柄だ。血圧が高く、酒を禁じられていながら、酒の好きな底ぬけの善人、芸界には珍しく気骨のある男だ。

あとのお方も、それぞれ一城の主たちで、志麻女の舞を愛すると聞くだけでも、初対面の気がしない。

席が定まると、琴葉が緋毛氈に坐り

「山田先生の前で弾くのはかなわんわ」

と、迷惑そうに三味線を取る。

「お前の三味線を聴くのやない。お志麻の舞を見るのや」

そういうのは兵介さん。

「えらいすまん事」

と、琴葉が唇を突き出すと、志麻女は構えて形を取った。

今宵の曲は、兵介さんがたつての所望で「廓景色」さとけしき大石内蔵之助作の伝説を持つ地唄の代表作で、さほど長くはないから此処にその全文を掲げて見る。作詩は大石うき、節付は岸野次郎三といわれる。

「更けて廊の粧い見れば、宵の燈し火うちそむき寝の、夢の花さえ、散らす嵐の誘い来て、寢屋を呼び出す情人男、他所のさらばもお哀れにて、埒も中戸を明くる東雲、送る姿の一重帯、解けてほどけて寝乱れ髪、黄楊の、黄楊の小櫛もさすが涙や、はらはら袖に、こぼれて袖に、露の夜すがの憂きつとめ、こぼれて袖に、つらきすがの憂きつとめ。」

これが全文で、廊の女の哀れを唄い、詩章としても美しい。本当に大石内蔵之助が作ったものであるとしたら、彼は相当の知識人と見る事が出来る。うき大尽が、大石の別名であったというが、廊で遊んで名を秘する者が、うき大尽の別名を使つたのは、彼一人にとどまらない。どのうき大尽か、疑わしいとは思ふけれども、一力の茶屋と赤穂義士とを結びつけたがる好事家が、内蔵之助の作といふ伝えたのではあるまいか。

真実彼が作ったのであつても、何人かが添削を施し、不足を補つて、このような名文になつたものか、或いはその後の長い年月を、次次に語りつがれて、今のうちに洗い上げられたものか。

これはむろん、私の臆測にすぎないけれども、大好きな詩章だけに、播州赤穂の田舎武士が作ったとは何としてもうなずき難く、勝手な想像をめぐらしている。

閑話休題

琴葉の弾き語る廊景色につれて、舞い立つ志麻女の手振りの美しさは、今更くだしく描くまでもない。兵介さんを初めとして、席に並ぶ全員は、幾度か目に馴れて、今更、その妙技に驚く者はない筈でいて、琴葉の地唄と、志麻女の舞のかもしれない出す雰囲気は、苦界に沈む女たちの哀れが、胸に深くとしみ入るようで、涙を誘わずには置かないのであつた。

舞い終つた志麻女が一礼すると、狭い座敷であつたにもかかわらず、私たちは思いきり力をこめて

拍手した。とたんに志麻女は、がっくりと体をくずし

「おおしんど」

と、さもさも疲れたかのように

「お客が悪すぎます。手元が狂うたらあとで何をいわれるや判らへん。ほんまにしんど、もういやですえ。堪忍どっせ。あとは若いお方に任せます」

と、いいながら、長い裾を引いて、廊下の外へ走り去ってしまった。

そのあとで一同は、又ひとしきり、志麻女の舞の美しさをたたえ

「ほんとの事をいうと、お志麻さんの地唄舞は井上流とも違います。大阪の吉村や、神崎流も取り入れて、志麻女独特の物に上げています。井上さんが見たら気に入らないかも知れませんよ」

と、私はいった。

井上流は氣品を尊ぶ芸風だけに、廓くわくものの艶えんっぽい曲になると、やや固い感じがする。志麻女はその点に氣を配り、他流を盗んで工夫を加え、井上の名取りとしては、邪道の非難を受けているらしい。「家元さんはああいうお方ですよって、何にもいやはりまへんけど、はたがうるそおすよって、姐ちゃんも他所では踊らんようになりました」

と、琴葉もひっそりという。

私たちは、何流であろうと、問うところではなく、完璧な芸になっていれば、それで満足なのだが、芸能界のそれぞれの派閥は、自流を主張して窮屈になり、流派を越える事はなかなかむづかしい。その中で志麻女が、自流の上に工夫を加え、芸に磨きをかけているのは、彼女の持つ芸域の広さだ。

六十に近くなっているながら、肌の色艶もおとろえず、体中が若若しく見える。